

新聞における敬語の研究

田 中 玲 子

敬語は日本語の一つの大きな特色であり、種々の方面からの研究対象となるが、マス・コミュニケーションにおける敬語は、社会的な価値感情に基く敬意の表現として特色づけられる一つの興味ある現象といえよう。^{註1}

今日のマス・コミュニケーションでは、主体も客体も共にマス（集団）であって、記事を書く記者はたとえ個人であろうとも個人的主観や価値観を捨てて誰にでも受け入れられる公平な立場、即ち「公共の立場に立つ」^{註2}事が必要とされる。たとえば皇室や国民の指導的地位にある人物を扱う場合などは「公共の立場に立つ」ての敬語、つまり一般民衆の価値観を代表する敬語を用いることになる。個人的な主観や価値観を極力抑えて、その時代における社会一般の感情に従うことを余儀なくされるのである。

さて、ここでは新聞における敬語を対象としたが、以上の理由によって、新聞における敬語はその人間をどれ位高く評価する

か、又その人格をどの程度認めるかというその時代の社会の感情や価値観を反映したものだと言えよう。

又逆にマス・コミュニケーションがその性質上社会に影響を与えるという現象も敬語を通してみることが出来る。すなわち社会的な感情をふまえてではあるが、マス・コミュニケーションの主体側として積極的に敬語の使用に関する方向を示すことによってそれが社会感情に影響し、社会の価値観を変えてゆくとも考えられる。

以上の点から、時代による変化をみる必要があり、新聞紙上に現われた敬語を歴史的に調べて、社会の変遷との関係をはっきりさせたいというのがこの小稿の目的である。まず便宜上時代区分をしてみると、新聞の敬語の使用が著しく変化する時期としては、明治二十年頃、大正始め、大正十年から昭和初期にかけて、昭和十年頃、太平洋戦争後を指摘することができる。これらの時

代は、社会的に見ると、憲法発布、日露戦争後、欧州大戦後、大平洋戦争および戦後であって、敬語の変化と社会の変遷とが著しく対応していることを示している。したがって、この時代区分によって、各時代の敬語の特徴を明らかにしたいと思う。

なお新聞の記事には、ニュース、論説、解説、家庭、投書、小説、広告等各種の欄があるが、この中、個人の署名入りの記事や広告は対象から除外した。この種の記事は個人的な観点から敬語を使用しているので、今この小稿で扱いたいものとは趣を異にする。したがって署名のない一般記者の立場で書かれた記事、特にニュースを中心に取扱った。

資料としては、朝日新聞社から出された、「重要紙面の七十五年」「世界と日本、激動下の七十五年」「社会面でみる世相七十五年」の三冊の抜粋、紙集の敬語の用例をすべてのカードに取った。それで大体的見当をつけ、さらに問題となる時期の辺りを上野図書館所蔵の朝日新聞でじかに調べることにした。上野図書館には東京朝日しかないの^{註3}で、明治二十一年以前は新聞集成「明治編年史」も使用した。なお用例の殆どは朝日新聞の記事で、それ以外のものは年と月の下に新聞名を記した。

註1 「新聞ラジオの敬語」森岡健二（「解釈と鑑賞」昭和三十

十一年五月号所収）

註2 同1

註3 大阪朝日は明治十二年創刊・東京進出は明治二十一年である。

一、明治初期

明治のごく初期は、官報と翻訳記事等が多く、個人に関する記事は殆ど見当たらない。五・六年「東京日日」「郵便報知」等新聞らしい新聞が創刊されてからを見ると、個人に関する記事では、皇室や官吏が多く、華族、軍人、宗教家、一般著名人がそれに次ぐが、無名の一般人民に関する記事は少いようである。

上級官吏や華族、軍人、立派な宗教家等には、たとえば、

全権弁理大臣大久保公去ル十九日上海へ着セラレ……（明

七年九月東日）

東京府華族島津久光公は病患の爲め予て鹿児島県へ赴き居られしが此節は病患全快なるに依り御帰京の砌り来る廿八日には当地へ御着なると……（明十二・一）

……京都本願寺の大教正大谷光尊并びに大谷光勝の両君には来月一日該地発途陸路を帰京せらるゝ由。（明十五・五）

……山本少佐が東京鎮臺歩兵等三聯隊第一大隊を率ゐる出立

せられたり。(明十七・十二)

……に付板原勤業課長が上京せらるゝ由。(明十九・一)
等のように敬語を用いている。

さらに官吏ならば、下級の官吏であっても、

……立合のため府庁土木課の官吏が出張せられし由なり。

(明十二・一)

……巡查阿蘇次郎氏は警部補に昇任せられたり。(明十七

・七)

と敬語を使う。敬称はもちろん、述語にも敬語を用いることが特徴的である。これは、当時政府の保護を受けた新聞が多かったからでもあろうが、封建的な江戸時代から続いている、いわゆる「お上」を恐れ尊ぶ一般の心情、官尊民卑の風習、又華族や僧侶への盲目的な尊敬によるものであったろう。

民間人でも、ごく著名で立派な人には、

福沢諭吉先生東京府へ差出されし願書の写(明六・五東日)

板垣退助君は今日当地を発して高知へ帰らるゝといふ。

(明十七・十一)

のように、官吏等と同じ扱いをしているが、名もない一般市民には、

……鴻野多平と云へる人は勉強堪忍の力強く……器機を発

明したり(明十六・三)

のごとく敬語は勿論、敬称もつけないのが普通である。

皇室には早くから、

聖上両后宮とも小御所へ出御あらせ玉ひ……を賜はせられ

たりと承はる。(明十五・一)

のように、特別の語彙や言いまわしを用いているが、このような皇室に対する敬語は、

聖上陛下には……情況を聞召され深く御軫念相成り近侍に

対し種々の御下問を賜ひたるやに拝承す。(大二・二)

などと続いて、大平洋戦争が終るまで、主な言い方はほとんど変わらないようである。

外国の人々には、ごく始めは皇室にも敬語が使われず、中には敬称のない例もあった。

英吉利女王ビクトリヤ、此女王は……アルベルトを迎へて

夫とし四男四女を生み(下略)(明二・四、中外)

外国の記事を翻訳する時に、敬語を入れずそのまま訳したと思われる。

外国の皇室に対しては明治五・六年から、

清国先帝の正嘉順皇姪は……御当人もうしろめたく思召

し(下略)(明八・四、東日)

のように敬語が用いられ、一般の人々に対しては、日本人の場合と同じく華族・官吏（政府）・軍人・学者・宗教家・著名人等に対して、十一年以後、

去る一日文部省の学監英国人タヒットモルレー氏は……往かれし由。（明十一・四、朝野）

魯国陸軍中将チエルニャエフ氏は……上京せられたり。

（明十七・七）

のように敬語が使われるようになる。恐らく日本人に関する記事からの感化であろうが、外人観が変ってきたとも想像される。

二 明治二十年前後

前記のような、内外の華族、官吏等公職に従事する人々・宗教家・著名人（名譽な）に敬語を用いた記事は、

……老相ビスマーク侯は……と誇言せられたる由（明二十
一・七）

森文部大臣は……赴むかるゝ由。（明二十一・八）

のように明治二十一年までみられる。しかし明治十九年から二十年にかけて、表現を工夫して変化しはじめ、たとえば

……内海知事より神戸貿易会所へ訓令ありしは……（明十

九・十二）

澳国公使ザルスキー氏は……当港を出発ありたり。（明二
十・四）

のような述語の変化が目立ってくる。さらに敬語を使わない用例も、

法制局参事官広瀬進一氏は……より来りて中の島の花屋に
投宿せり（明二十・十二）

ブルーランシア將軍は群衆喝采の声と共に代議院に於て其席
に就きたり。（明二十一・四）

等と次第が増えてくる。そうして明治二十二年以後は皇帝をのぞいて、これまでの述語に敬語を用いる習慣を一切廃止する。即ち敬称以外の敬語を用いないのを原則とするのである。

この傾向は他の新聞でも殆ど変りない。「東京日日」が少し遅れるのをのぞけば、「時事」「郵便報知」「朝野」など多くの新聞も二十二年頃には、特定の人達に対する敬語を廃止しているように、これらは注目されるべきであろう。このような大きな変化がなされた原因が当然問題となる。明治十八・九年頃には、十六年伊藤博文が帰国して憲法の草案を作り、二十二年の発布、二十三年の国会開設を待つて国民の間に幼稚ながら民主化の気運が高まり、それが新聞に反映して特定の人に敬語を使う習慣を止める傾

向が表われ、憲法発布の二十二年からは徹底すると推される。

と共に新聞社側の変化、即ち「東京日日」など政府の保護の下に創刊されてきたが、十九年の「郵便報知」の改革等で一般に報道尊重に向い、二十一年「朝日」の東京進出に刺激されて営利本位に移つてゆく等、特定の人だけに敬語を使つてはすまされなような状態になつてきたのも、敬語廃止の傾向を徹底させた要因として考え合わされるべきだと思ふ。

ただし、人の死亡に関する記事は例外で、

……子爵相馬誠胤氏逝去に到るまでの……（明廿七・七）

畏き辺りでは今回薨去せられた山本五十六海軍大將に対し

……（昭十八・五）

などのように、社会的な地位の高い人にはずっと敬語を使い、宗教家には「入寂」「遷化」等と敬意をもった特別の言い方をたびたびしてきた。これらは大太平洋戦争後も、

勝田永吉氏（元衆議院副議長）……逝去した。（昭二十一

・六）

のような例を時々見かけるが、昭和二十二年からはすべて死去に統一されたようである。

この二十年頃には、新聞としても整つてきたし、個人に関する記事も増えてくるので、ここで一般の人々に対する敬語をみてお

こう。

まず女性の扱いは、身分の高い人でも、

東京府華族細川護久君の母堂峰子の来坂に付……に着したる旨……（明二十・四）

華族女学校の教授下田歌子には此度……と結婚の約整ひ……

……（明二十四・七、朝野）

正親町伯邸焼く、……伯及び夫人兎美子外家族七人は……

（明四十五・五）

などと敬称をつけない。一般の女性は勿論呼び捨てで、当時の男尊女卑の風習を明らかに示している。

ただし男子に伍して社会的な地位を有している女性のうち、高貴な人や活潑な運動をした大立物には、

桜井女学校長矢島かぢ女史（明十九・十二、朝野）

光栄ある歌人 柳原愛子刀自 刀自は……典侍小池刀自と

共に女官の雙壁と称せられる。（明四十四・一）

に見られるように、「女子」「刀自」などの敬称をつける場合もある。

又外国の女性には、

内国電報……野戦病院視察の為の戦地へ赴きたるマツコレ

嬢は……（明三十七・六）

例の通訳美人ヤジュウ・ペリヤ女史は……(明四十五・五)

と早くから敬称をつけ、少数例ではあるがほとんど例外がない。

これは、欧米の人名に英語のミスやミセスに類するものがつくので、それをそのまま嬢、夫人、女史等と訳してつけたためではないだろうか。

次に中流階級の人(民間の俸給生活者、自由業、村長、市長なども入れた)には、

……村長月村惣左衛門氏は……壮士十余名に要撃せられた

り。(明二十五・二)

……弁護士法学士桜井熊太郎氏(四十九)は……(明四十

四・三)

にみられるように敬称をつけた記事はあるが、その他の敬語は見られない。しかし全体としてはまだ敬称のつかない例が多く、たとえば、

……南区開業医高原河合南岡の三名緒方部長に面談し……

(明二十・十二)

……学校には教諭小林堅好、米津仲次郎、藤井巖残りて……

……(明四十三・一)

のごとくである。

さらに下層階級と思われる人達には、

難船……磯崎岩吉が持船……(明十八・十二)

……消防夫小倉銀次郎(三十五)が発見し……(明四十四

・三)

等と敬称をつけないのは、言うまでもない。

一般の外人はあまり紙上に名を表わさないが、

……彼船長ボーチリヤー氏は謝状を認め国千保丸船長浜田に送り……(明二十二・七)

三人の世界徒歩周遊者の一人独逸人ヘリー・スタップ氏は

……(明二十九・六)

等のように、大抵敬称がついていて日本人より高い扱いになっている。これは女性の場合と同様、ミスターの訳にすぎないかもしれないが、或は外人に対しては特別の意識を抱いていたことの表われかもしれない。

その他、全く敬称がつかないで目立つのは未成年者(学生)、芸能人、運動選手等である。

兵庫県神戸医学校生徒石浜喜久松外十八人の……(明十七

・七)

遭難学生の一人なる松尾寛之(十九)は……松尾監三氏の長男にして家族は……弟寛吾(十六)神一(十一)妹さわ子

(十才)の……(明四十三・一)

特に芸能人や力士のような職業的運動選手を呼び捨てにする習慣は今日まで続いていると言えよう。

故市川団十郎の葬儀……俳優の泰斗日本随市川団十郎事堀越秀の亡骸は……市川左団次の弔詞を同人伴廷升代読し……川上音次郎の弔詞朗誦あり。(明三十六・九)

大阪大角力当場所勸進元中村松五郎は……取締朝日山まで申出たれば……(大三・一)

チャップリン敗れたり チャップリンは……(昭七・五)

……主役早川のぶ子には雪村いづみが選ばれた いづみは……(昭三十一・十)

三、大正初期

我が国の産業は日清戦争後、大陸進出で飛躍的に発展し、日露戦争によって重工業も著しく進んで資本主義経済が空前の発展をみた。社会的にも日露戦争後は国際的地位を確立し、人心は落ちつきかつ希望に満ちて新しい社会を礎にいった。新聞もこれらの戦争が契機となって、発行部数の激増や通信網の設置等と大きく発展した。年号が変わり、それらを反映してか、大正に入ると敬語使用上に変化がみられる。

まず中流階級の人には、ごく少しの例外をのぞいて、大正以後呼び捨てにしくなる。

……写真界の元老帝室技芸員小川一真氏は……(大七・六)
飯田技手の沈勇……技手飯田清太氏の沈勇な動作の賜だった。(大十・四)

……西淵訓導の語る所に依れば……(大十一・十二)

ただし下層と思われる人達には

……長岡駅赤帽石沢福次(四十三) 長谷川熊太郎(三十五)
兩人の供述に依り……(大八・六)

のように敬称をつけない。

前節に記したように、芸能人や職業的運動選手は呼び捨てだが、未成年者には、

二十五哩マラソン……十六才の少年愛知一中の加藤勇君……(大六・五)

に見られるように、極く少しではあるが、敬称のついた記事がみられるようになる。

なお、これまで敬称と言ってきたものの中には、役職名を敬称の代用として用いる場合も含めてきた。たとえば華族や宗教家の称号は、内外をとわず非常に名譽な役柄と思われるにいたし、役名が階級を表わす官吏、軍人の場合も早くから敬意をもって役職名

が人名の下につけられていた。一例を示せば、

大村兵部大輔は……(明二・十一、中外)

……大谷中教正廿七八日の両日は大谷大教正が当地の別院

へ……(明十三・十)

……山本少佐が……(明十七・十一)

等である。明治二十年をすぎるとこの傾向は増して、「ブーラン
ジャ将軍」「田中議長」等のように役職名をつける割合が多くな
る。しかしまだ民間、一般人の役職名はつけない。

それが明治の終頃から外国の人名に「博士」をつけたり、日本
人にも「校長」「書記」「選手」等をつけたりして、これらをも
って敬称の代用とするようになった。これが大正に入るとその範
囲がますます広くなってくる。主なものでは「社長」「重役」等
社会的地位のあるものから、「技師」「技手」「訓導」「消防士」
「村長」「弁護士」「飛行士」「雨勇士」等であるが、これほど
一般化してくると、敬称というより丁寧な呼称といった程度のも
のになっている。「役職名+人名+敬称」の形をとるより、「人
名+役職名」の方が簡単であり、敬称が広く一般の人につけられ
るに従って、後者が一般化するのには新聞記事として当然と言えよ
う。

昭和に入ると、「運転手」「車掌」「巡査」等と役職の種類を

問はず、この方法はますます一般化してゆくが、大正期における
一般の役職名の敬称化は最も注目すべきものであつた。

四 大正末期から昭和にかけて

女性に対する敬語に関しては、大正の始め頃は明治時代と変わ
らなかった。

……乃木大將は……夫人しづ子(五十二)は……大將の姉
なる小笠原きね子は……(大一・九)

貴族院副議長候爵黒田長成氏夫人きよ子は……逝去せり。

(大七・二)

ところが七年頃から、所謂三面記事などにおいては、

……八幡製鉄所長官押川則吉氏が……愛子夫人(五二)は

……(大七・二)

……老候の親戚住友男爵、同忠輝氏、孝子夫人が自動車を
列ねてくる。(大八・一)

のように、「何(子)夫人」という敬称があらわれてくる。大正
十年以後には、記事の種類を問わず、中流以上の人々の身内には
敬称をつけるのが一般化する。

男勝りの浅子夫人 原首相はかねてから浅子夫人に対し：

…(大十・十一)

有島武郎氏……久子母堂を中心に全く途方に暮れている。

(大十二・七)

これまでどんな立派な人の身内であろうと(「女史」等がつけられる人物をのぞいて)呼び捨てにしてきたのだから、中流以上の人の身内に敬称を用いたことは最も注目すべきだと言えよう。なお、これ等の背後には、欧州大戦後のデモクラシーの思想に加えて、政府の米騒動記事差止めに対して起った「言論擁護運動」や普選運動等の意気の高まりがあり、女性観や人間観に大きな変化があつたことを認めなければならない。又紙面上でも十年には文語体から口語体へ言文一致が実行されている。ただし下層の人たちの身内や、「女史」と呼べない程度の独立婦人にはまだ敬称がつかない。これは当時「夫人」「女史」「刀自」「嬢」等の敬称しかなく、この様な人達への適当な敬称がなかった事も関係するかもしれない。

千駄ヶ谷大火……番人西島豊四郎(六〇)及び妻くにの二人だけで……(大十四・三)

「強兵」行列……神奈川県立高等女学校教諭小花いく子(三四)……等も居た。(大六・一)

……六年生受持女訓導池田しを子(二八)が女生徒をつれ

て……(昭五・四)

次に男子に関する敬語をみると、下層と思われる人達にも、

……救助に駆登ったのは小島消防手であつた……小島消防手が……(大十一・四)

……伊勢平商店の工藤勝三郎氏同居倉重繁男氏等は十日所得五円全部をも投入したが……(大十三・九)

等と敬称をつけた記事が見られるようになり、昭和になると、例外はあるが特定の場合をのぞいて敬称のつくのが一般化してくる。

四谷伝馬町三味線屋ねこやこと熊沢さんの発起で……(昭

二・三)

未成年者の場合、良家の子弟には、

首相の実姉逝去す……同家には愛孫義雄君(目下広島中学二年生)……(大十二・三)

のように大正十年頃から敬称のつく例もあり、昭和になるとその割合もずっと多くなる。

松平節子嬢は目下令妹正子嬢と連れ立って……長男一郎君が水戸高校在学中で……次郎君をよくいたはり(下略)(昭三・一)

洋画家有島生馬氏は令嬢暁子(一七)さん、天才ピアニス

ト原智恵子（一三）さん……の四人伴れで……（昭三・三）

勿論まだ次のように敬称をつけない例は多い。

スキー登山成功す 弘前高校生……宮川善蔵外五名は……

（大十二・三）

……寝台係給士北野新治（一九）は……（昭五・五）

又芸能人に敬称をつける記事も表われる。

沢田正二郎氏逝く（昭四・三）

、以上のような傾向にしたがって、昭和になると敬称「さん」が広く用いられるようになる。

五 昭和十年頃

昭和の九・十年頃になると、これまで敬称のつかなかったごく平凡な女性にも、

……「テニスファン社」に執務中だった婚約者岡田早苗さ

ん（二二）の……（昭九・四）

……農加藤兵吉（四五）は……次女かめよさん（二一）を

売らうとしたのを……（昭十・一）

と敬称がついて、十年以後それが一般化する。ただし昭和十年以後でも、芸能人や芸者、女給等は、特に本名でない場合には呼び

捨てにして今日に至っている。

又この頃から未成年者にも敬称（愛称）をつけるのが普通となる。

入院中身売……加藤幸吉（五〇）一家は、きさ子さん（一

七）を頭に……（昭十・一）

幼児轢殺さる……文房具製造業大関覚次郎二男光雄君（五

才）が……（昭十二・四）

又芸能人や職業的運動選手でも、本名の場合や記事によっては敬称がつけられる。

……入院中の中村鴈治郎丈は……（昭十・一）

井上一座の女優竹内京子さんは……（昭十三・一）

……この安芸海——永田節男君（二六）で……（昭十四・一）

昭和十年頃の日本というと、所謂七年の「五・一五事件」や十年の「二・二六事件」が起り日本ファシズムの支配が確立するのであり、美濃部達吉博士の天皇機関説問題、その他に見られるように国内の民主々義的、自由主義的勢力に対する弾圧が強行された時期でもある。それにもかかわらず新聞紙上では、一般市民は勿論、未成年者、芸能人、運動選手等に対しても人格尊重の傾向をとっている。それは、ファシズムや「国民一家族」の考えの中に案外平等の思想が含まれていた為かもしれない。その点私

にはわからないが、新聞における敬語は民主的な方向に一時期を画している。

六 大太平洋戦争後

神国から敗戦国へ、上に天皇をいただいた軍国主義の統一国家から民主国家への著しい変化はここに記すまでもないであろう。新聞もその自由を確立し、紙面も二十六年から毎日四頁発行し、夕刊も出されて落ちついてくる。又新仮名遣や新漢字も二十一年からみられ、二十三年以後、殆どこれらを使っている。

戦後における新聞の敬語使用上の最も著しい特色は皇室敬語の変化である。戦前は外国の皇室にはそれほどではなかったが、我国の皇室には前述のように特別の尊敬語、謙遜語、言い廻しを用いてきた。終戦後でも、すぐならば、

……畏くも天皇陛下の親臨を迎え奉り……玉音朗々と優渥なる勅語を賜ふ。(昭二十・九)

皇太子殿下は……午後二時還啓遊ばさる。(昭二十・十二)のように、以前の言い方が続いている。

それがはや二十一年になると、

……皇后陛下が突然その作業場へお見えになった。(昭二

十一・三)

天皇陛下は……御視察になった。陛下はお車からソフトをうちふられつゝ歓呼にお答へになった。(昭二十一・三)

等と、普通の敬語の範囲内での言い方が多くなる。即ち特別詠の名詞や形容詞、「何々遊ばされる」「何々あらせられる」等の言方を避けて、普通の言葉、「―れる」「お―になる」「御―になる」の形等を用いて今日に至っているのである。

外国の皇室に対しては、戦時中以外は、

白耳皇帝は維廉陛下^{ウキルヘルム}を訪問せられたり(明三十七・一)

エドワード八世御退位の結果皇弟ヨーク公殿下は……王位を継がせられジョージ六世と御名乗遊ばされるに決定した。

(昭十一・十二)

と、我国ほどではないが敬語が使われてきたし、我国を訪問された場合等はやや丁寧な扱いになる観がある。満州国皇帝には、日本の皇室に準じて非常に多くの敬語を使った。

満州国皇帝陛下には……の数々を御供出遊ばされる旨仰せ出され……(昭十九・十二)

戦後になって、

エチオピア皇帝の一行は……ご休憩の後、自動車で上京される。(昭三十一・十一)

等のように敬語を使った記事も勿論あるが、

「アムステルダム四日発UP共同」オランダのウィルヘルミナ王は……王位から退いた。同時にアリアナ王女が……位についた。(昭二十三・九)

「同」……のニュースを受けたエリザベス女王は……祝電を発する様指示した。(昭二十八・六)

のように、外国からの通信記事では敬語を用いないのが普通である。

又戦後少したってからだが、内外の大政治家、大軍人、位のある人、著名人に対してしばしば用いてきた「逝去」「薨去」や、宗教家に使う「遷化」「入寂」等の特別な用語を止めて「死去」に統一してきた。

戦前は、自殺や心中の当事者や犯人の身内等社会的に不名誉な行為をした人には、

運転手の自殺……自動車助手谷川定義(二二)で……(昭九・一)

(前略)元市電従業員桑野喜喜雄(二九)が妻アイ子(二七)と自宅で服毒心中を……(昭十一・五)

のように敬称をつけなかった。ただし

……乃木大将は夫人と共に短刀にて自殺し鮮血にそまりつ

……(大・九)

軽井沢で有島武郎氏心中(大十二・七)

等社会的地位の高い人や著名人には敬称をつける。

戦後には一般の人にも、

平沢は……現在の妻マサさん(五二)と結婚……(昭二十三・九)

母子心中をはかる……道夫人が自宅二階十畳間で……(昭二十四・七)

のように敬称がついてくる。しかしまだ

渋谷の女殺し 同人は殺された宮下ミツこときぬ子(二四)の情夫で……(昭二十五・七)

等があり、徹底するのは二十六年以後である。

又戦後は、敬称も特別なものはあまり使わず、「氏」「君」「さん」「ちゃん」を広く適用しようとする傾向が顕著で、殊に「さん」の適用範囲が著しく広くなった。

むすび

一節や二節で述べたように明治の前期には華族や公職に従事する人々、宗教家に対して述語にも敬語を用いたが、明治二十年以

後は敬称以外には敬語を用いなくなった。ただし皇室と有名人の死亡に関する記事にのみ敬称以外の敬語を使ってきたが、それも後者は終戦後廃止され、皇室に対する敬語だけが今日も残っている。

この小稿では、一応人格を認めたあらわれとしての敬称について多くを述べてきたが、新聞紙上における敬称としては、氏、君、さん、夫人、女史等が多く、殿、翁、師、先生、丈、丈夫、関、画伯、嬢、ちゃんも使われてきた。その全部は検討できないが、二三拾ってみた。『氏』は明治の始めから現在まで使われている最も一般的な敬称であって、対象は内外の総理大臣から芸人能人までと巾が広く、男性が普通だが記事によっては女性にもつける。『君』は明治初期に成人男子の敬称として用いられたが、

従二位島津忠義君の……（明十二・十）

……権中教正芳村正乗君は……（明十五・三）

大正六年頃から未成年者、運動選手、下層の人々の敬称となり、今日では主に五・六才以上の男子未成年者に用いられる。又議員や党員、議会の模様を示す場合には昭和十五年頃まで『君づけ』をつづけていた。

『さん』は比較的新しい敬称で、明治時代にはみられず、大正時代でもくだけた言い方や、所謂三面記事にあるだけであった。

昭和になって中流階級の女性、男性の下層と思われる人達、未成年者につき、十年以後社会的地位のある人の身内にも用いられ、今日では九・十才以上の女性の殆ど全部や会社社員程度の人にもつけられて、巾が非常に広がった。『ちゃん』も昭和十一年頃から使われた新しい、子供の敬称（愛称）である。

時代を問わず明らかに敬称をつかないものとして、犯罪者と敵対国の人物がある。

犯罪者には、古くから今日に至るまで敬称をつけないのが原則である。

……県会議員安部安五郎は犯罪のかどある旨報知あり……（明十六・三）

強盗押入る……逃げようとした中沢弘（二〇）を逮捕した。（昭三十二・十二）

ただし、社会的地位の高い人や軍人等には、

留学中の石田教授 米國博士を殺す「ウ博士を殺した石田医学士」（大七・十二）

……十四聯隊付中尉田村徳積氏（三一）が同僚の昇進を見て羨望、……を殺害自分は京成電車軌道に飛込んで轢死……

（昭七・五）

のように敬称をつける場合もある。

次に敵国人の場合で、敵国の皇室の記事は少いが、

英帝ジョージ六世は印度民衆に対してメッセージを送り、

皇弟グロスターが……ラジオで放送した（昭十七・六）

のように敬語は一切用いない例が見られる。敵国の政治家や軍人を呼び捨てにする習慣は明治から今日までつづいており、国民感情の反映の著しさを伺う事ができる。

李の容態と恩賜 李鴻章の……（明廿八・三）

新宰相エベルトは……（大七・十一）

米大統領ルーズヴェルト、英国首相チャーチルは……宋美齡を帶同して飛込んだ蒋介石との間に……（昭十八・十二）

ただ欧州大戦以前は徹底せず、敬称の付くことがあったが、太平洋戦争になると例外なく敬称なしで通してきた。

以上まだ不完全であるが、社会的背景を考え合わせながら敬語の変遷をみてきて、新聞の敬語及びその変遷は、多くの場合社会的感情や価値観とその變動に密接な関係を持ったものである事を示したものである。

この様に変遷を調べてきて、もう一つ明らかなことは、新聞における敬語は人間一般に対して無差別な方向に、民主的な言い方に向ってだけ進んできたという事である。言い換えると「階級的な敬語から、人間尊重的な敬語」に明治以来変化し続けてきたの

であって、これは名誉ある人、官職に従事する人々に敬語を使うのを止めて、次第に一般市民や女性等にも広く敬語を付けるようになったことの他に、地位の上下や職名にかかわらず役職名を敬称代りに用いること、敬称の種類を少くしてそれを広く適用しようとする事、皇室にも特殊な敬語を使用するのを止めて普通の敬語で間に合わせようとする傾向の中にも認められる。

（昭・三二・三・国率 日本文学科学生）